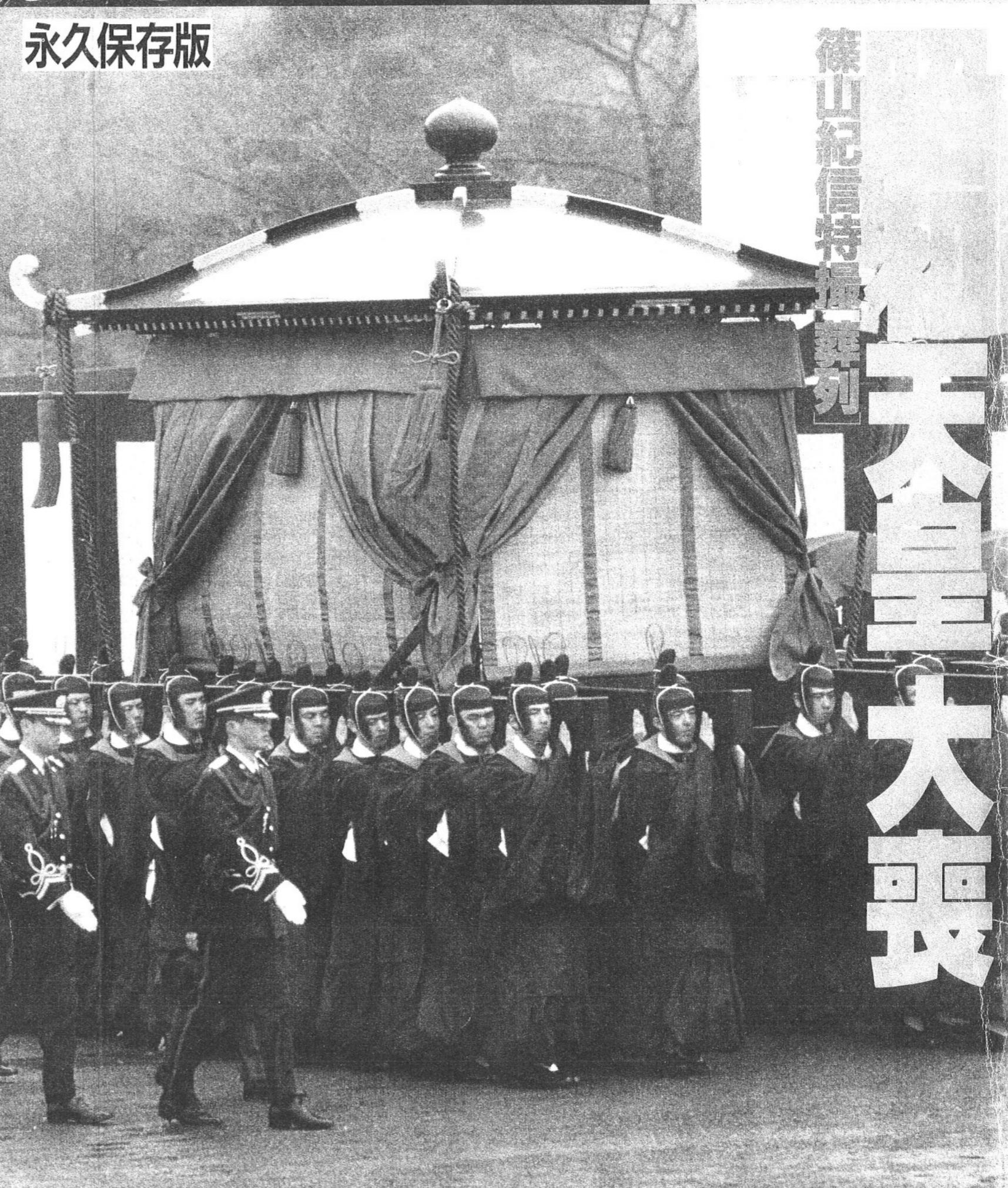


アサヒグラフ 310

1989
ASAHIGRAPH
週刊
大正12年1月23日第3種郵便物認可
1989年3月10日発行 通巻3477号(毎週金曜日発行)
増大号 特別定価 550円

永久保存版



木村弘子さん(42) 下水道の母

毛管浄化システム

下水道の母

木村弘子さん(42)

設立 1980年3月
年商 1億2千万円
従業員数 12人（男性7人、女性5人）
事業内容 土壌浄化法による10万都市以下向き小規模下水道計画、農業集落排水事業基本計画・実施計画、住宅・学校・病院の浄化槽についての設計、建設コンサルタント。

文=土本ア理子 撮影=早助康子

「水洗トイレが欲しい！」と願っても、地方の小さな町村ではまだまだ高嶺の花。そんな下水道後進国ニッポンを先進国に、と父親が開発した「土壤浄化法」をひっさげ、「小規模下水道」の普及に東奔西走する木村さん。「大きいことはいいことだ」の國の事業に主婦感覚でもの申す。



「家庭からの排水は一人当たりドラム缶一本分(200㍑)。たれ流し状態の水を、今、なんとかしなくては。下水道だけじゃなく、水問題のお医者さんになりたい。私の知恵と技術を使って下さい」（埼玉県熊谷市の荒川で）

「大きいことがいいことか、小さいことがいいことか、下水道を考える場合、私はまずこの点から議論したいんです。といいますのも……」

説明しながら、運転席の木村弘子社長はヒュッと大胆に車線変更をする。

「ご存じですか？」都心では下水道の完備が当たり前。でも五万人以下の町村の普及率はわずか五割。理由はカンタンです。雑排水を大きく一ヵ所に集めて処理するのが従来の事業。一戸一戸離れている集落だと、小さな事業費がかかり、手が出ない。ところが発想をえてみると、小さい集落でも下水道はできる。つまり一ヵ所に集めず分散させる。この規模下水道を可能にしたのが、父が開発した土壤浄化法（ニイミシステム）という汚水処理技術なのです。

その「土壤浄化法」の処理施設がある立正学園大学熊谷校舎を見学するために関越自動車道を北上したのだが、時速は常時百キロ。「施設は見ていただくのが一番」と、自らハンドルを握つて案内役を務める木村さん。運転ぶりに感心していたら、父親で土壤と水の研究者・新見正さん（74）の言葉を思い出した。

「私の秘書をしてたから、門前の小僧の手習いで覚えたんでしょうが、今は行政を説得したり、地方の自治体を歩いて汚水・汚泥問題に体当たりしている。まあ、男勝りのおとんば娘ですね。ハハハ」

◇
見学地、立正大の校内に広がる芝生は一見ただの芝生に見えた。が、あちこちにもぐらの穴がある。

「この芝生の下に雑排水を浄化するトレンチ（ろ過槽）が敷きつめられているんです。汚水は毛管浄化作用といった浸透圧のかげんで土壤を通過し、汚れのものと有機物は微生物や土壤動物が食べて分解する。この土壤の自然浄化能力を生かした汚水処理法が『土壤浄化法』。もぐらも栄養がいいから元気なんです」

下水道話なら何時間でもという木村さんだが、もとはなんと幼稚園の先生。日本女子大学児童学科を卒業して三年勤め、その後、三人の子供を産み、趣味のアートフラワーを近所の主婦に教えた。といつたまつたくの「おかあさん」をしていた。

生活がガラッと変わったのは、一九七三年。それまで建設者が中心だった大規模な流域下水道、公共下水道等の事業に、農水省が農業集落排水事業として小規模下水道で参入する。気分の発散はカラオケ。「男性は『抱擁』とか、ちょっといやらしい歌が好き。私が好きな谷村新司の『群青』、なんてちっともウケない」（東京・池袋のスナック「群青」で）

「自分の町や村を考え、いきいきしている人間に会つのが、一番の楽しみ」



「下水道事業は実績と人脈がモノをいう男社会。児童学科卒業で、土木とも衛生工学とも縁がなかった私にとって、唯一の人脈作りは過去3回の自治体関係者が集まつた水問題の海外視察旅行。各地の人の声が聞けて、なにより貴重な経験でした」（埼玉県の江南町学校給食センターで）

ることになつてから。在野でコツコツがいいから元気なんです」

下水道話なら何時間でもという木村さんだが、もとはなんと幼稚園の先生。日本女子大学児童学科を卒業して三年勤め、その後、三人の子供を産み、趣味のアートフラワーを近所の主婦に教えた。といつたまつたくの「おかあさん」をしていた。

生活がガラッと変わったのは、一九七三年。それまで建設者が中心だった大規模な流域下水道、公共下水道等の事業に、農水省が農業集落排水事業として小規模下水道で参入する。気分の発散はカラオケ。「男性は『抱擁』とか、ちょっといやらしい歌が好き。私が好きな谷村新司の『群青』、なんてちっともウケない」（東京・池袋のスナック「群青」で）

もつとも経営はズブの素人。ニイミシステムの許認可をめぐつて建設省、厚生省、農水省など役所を相手に奮闘し、果ては、認可を得るために調査費用に八千円もの借金を背負ってしまった。

「お金もうけが目的だったら、絶対手を出さない道にどんどん進んでしまう。無茶はきっと父ゆづり」

所の主婦に教えた。といつたまつたくの「おかあさん」をしていた。

生活がガラッと変わったのは、一九七三年。それまで建設者が中心だった大規模な流域下水道、公共下水道等の事業に、農水省が農業集落排水事業として小規模下水道で参入する。気分の発散はカラオケ。「男性は『抱擁』とか、ちょっといやらしい歌が好き。私が好きな谷村新司の『群青』、なんてちっともウケない」（東京・池袋のスナック「群青」で）

と、今は笑える。建設大臣の認可を取りつけ、昨年春には、町村下水道で土壤浄化法を採用しても補助金が出るようになったのだ。

◇
建設大臣の立場でこれを普及させた。それで、長女の木村さんが手伝うことになつたのだ。五年間のカバシ持ちを経て、「父は研究一筋の人。私は主婦の立場でこれを普及させた」と八〇年、下水道コンサルタント会社「毛管浄化システム」を設立した。

補助事業の第一号は、北海道は空知連峰の山ふところ、占冠村。「貧乏」と八〇年、下水道コンサルタント会社「毛管浄化システム」を設立した。

道の調査・検討を請け負い、一町村でも多くの下水道完備をめざそうといふもの。

土壤浄化法の正確な運用と技術研修制度を設けて、全国に施行代理店をもつなど、事業はコンサルタント会社からベンチャービジネスの性格もそなえてきた。

夫は土壤浄化法の工法を伝える専門集団「毛管浄化研究会」の専従を務め、高校生の子どもたちが家事を分担する。木村さんは、月の半分、地方の自治体を回り、「小規模下水道」を行脚する。

自分の町や村を考え、いきいきしている人間に会つのが、一番の楽しみ。今、仕事が楽しくって」

下水道の母は、こう言つてさつそ

うと愛車に乗つた。